

歴史意識と資料保存観 ―横浜市域における歴史編纂を題材に―

Historical Consciousness and View of Preserving Records  
-Settle on the Subject Matter of  
Compiling Histories within the Area Yokohama City-

学籍番号: 201221580

氏名: 大坂 芙希子

Fukiko OSAKA

記録資料(アーカイブズ)の中でも、古文書だけでなく人間の歴史や文化を伝えると考えられる文献資料(以下「資料」)、特に、公的な機関ではなく個人・団体によって残された民間所在資料を中心として、日本各地で資料調査・収集・保存活動が行われてきた。これは、歴史編纂事業と関わって進められている。しかし、全ての資料が残るのではなく、保存するには選別が行われ、それには「どのような資料を大切だと考え、後世に残そうとするのか、資料保存をする際の判断基準となる考え方」(「資料保存観」と称す)が関わっていると考えられる。

阪神・淡路大震災後の被災地、特に神戸市域で、「近代以降のモダンな都市」という歴史意識が資料保存観に影響を与えたのではないかという事例が先行研究で確認されていた。そこで本研究では、「港」「異国情緒」等とイメージされる傾向にある横浜市域を対象とし、ここにおける資料保存観とその形成過程について明らかにすることを目的に、歴史意識と資料調査活動の傾向について分析を行った。横浜市域の歴史編纂史をⅠ～Ⅴ期に区分し、各時期における歴史意識(特定の地域の過去から現在に至る様相に対する考え方)を歴史編纂物の序文類から検討した。また、それが資料保存観形成に関わったのか、各時期における資料調査活動の傾向について、調査地域別分析・調査年代別分析を行った。

分析の結果、これまで横浜市域では、関東大震災・戦災などによって、横浜開港を起点として発展してきた町など、多くのものが失われたことが原動力となり、資料保存活動が進められてきたことが明らかとなった。歴史意識は、資料保存観と密接に関わっていると考えられる。しかしながら、横浜市域において、歴史編纂に伴って調査・収集された資料の現存状況は高くはないという実態が確認された。これには、歴史編纂事業後に資料を保管した資料所蔵者の資料保存観が関係していると見られる。今後、資料を残していくためには、資料調査活動を行う側と資料所蔵者との間で意識を共有し、地域全体で資料を保存していく体制を整えることが求められる。

研究指導教員: 白井 哲哉

副研究指導教員: 綿抜 豊昭